

琉球大学学術リポジトリ

林地肥培

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/20939 |

林地肥培

林地肥培とは一体どういうことでしょうか。一口にいえば山林に肥料をほどこすということです。

1) 林地肥培はいつごろからはじめられたか

林地肥培はいまから40年ほど前から、新潟県、静岡県、奈良県、佐賀県などの篤林家によって行なわれた例があります。そしてこれらの篤林家は、それぞれよい効果をあげています。こうした篤林家の実行に15年ほどおくれ、鏑木博士は「林肥料論」という本を公にされましたが、それがわが国で、林地肥培を学問的にとりあげた最初のものでしょう。このように篤林家の例や学者の意見がでましても、林地肥培は広く行なわれませんでした。戦後になって林地肥培の重要性が改めて見なおされるようになりました。

ある肥料会社は昭和22年に林業用として固型肥料をつくり、造林家にすすめました。これが林地肥培に対する一般の関心を高める動機となったようです。その後各肥料会社はきそって林業用肥料の研究に乗り出し、今では、成分や形や大きさなどの点で、それぞれ特徴のある肥料をつくっています。

2) 研究はまだはじまったばかり

林地肥培の研究は昭和26年をはじめとして、大学や国立林業試験場、あるいは国有林や地方庁林業試験場などで、それぞれ試験をはじめました。その後肥料を使う側の林業研究者と、肥培をつくる側の研究者とか集まって林地肥培研究会が設立され、こゝに林地肥培の研究ははなばなしい発展をとげるにいたりました。

こうした研究が盛んになるにつれて、一般の林業家の関心も異常にたかまり、これまでに林地肥培の行なわれた側は、全国で1万カ所を越えています。このような数多い例のほとんど全部は、幼令時代に施肥したもので、壮令林に施肥した例はきわめて少なく、また樹種ではスギ、ヒノキ、マツのような針葉樹が大部分で、広葉樹の例はほとんど見られません。

3) まず造林地の診断が必要

一般に林木に対する施肥は山に木を植えた年、または植えつけ後数年間の幼令時代に行なって、植栽当初の造林木の成長促進をはかることをねらいとしています。

林地に肥料を施す場合は、林地がどのような林地であるかを、まず吟味しなければなりません。前に述べた多くの肥培の例を見ますと、同じ施肥方法をとりながら、肥培効果が大きく現われるものと、必ずしもそうでないものがあります。これは主として地形や土壌の性質に関係するものであります。

水分と養分に富んでいる沢すじのところでは、一回ぐらい施肥しただけでは、効果が現われにくいものです。ところが傾斜面の中腹のところでは、肥料効果の現われる場合が多いようです。また尾根すじ近くの乾燥した土壌のところでは、水分の不足が原因となって肥料の効果は現われにくいとされています。もっとも、この関係は窒素にして1本当たり同一程度の肥料を1回だけ施す場合にみられる関係ですから、沢すじのところでも、何回も施肥して肥料の量を多くすれば、大きい効果が期待されるでしょう。

4) 施肥の時期はいつがよいか

施肥の時期としてはあらかじめ植穴にまぜておく方法、植えつけの時に施肥する方法、植えつけてから1年後に施肥する方法などがあります。さらに1回だけ施肥する方法と、1年分を2回に分けて施す方法があります。またこの施肥を1年だけする場合と、2、3年連続して行う場合があります。仕事の手順の都合もありましようが、できれば苗木の活着をみとどけた上で行うのがよく、春に1回施肥するよりも、春と秋の2回に分けて行うように、また1年限りよりも、2年以上続けて施肥するのがよいのです。

5) 施肥量

施肥量は窒素にして10gを標準とします。翌年から1年ごとに前年の2割増し程度がよいでしょう。

6) 施肥の位置と施し方

施肥の位置は、根に近すぎると肥料ヤケをおこしますからよくありません。根本から枝の長さだけ離して斜面の上部に半円状に浅い溝を掘るか、あるいは穴を掘ってそこに肥料を施します。溝や穴の深さは普通5cmから10cmぐらいがよいとされています。あらかじめ植穴を大きく掘って、土壌に肥料を混ぜておく方法もありますが、この方法によれば肥料が根に接触する機会が多くなり、しかも1カ所肥料の濃度を低くしますので、肥料ヤケの心配は少くなりますが、手間が多くなります。それにこの方法は、植えつけ時期に雨の少ない地方では、さけた方がよいでしょう。

7) 苗木や植え方その後の管理にも注意

林地肥培を行う場合には、ただ単に施肥するだけでなく、苗木の選択や取扱い、植えつけや植えつけ後の手入れなどに、充分注意しなければなりません。

(1) 苗木について

苗木の産地がどこであるか、また血すじがよいかどうか確かめる必要があります。産地と系統のよいもので栄養状態がよく、しかも病気や虫害にかかっていないことが大切です。また根がすなおに発達しているものを選ばなければなりません。

苗木を運搬したり、仮植したりするときに、苗木がむれたり、根が乾いたり弱ったりしますと、肥料ヤケにかかりやすいから、注意しなければなりません。

(2) 植つけについて

植つけの場合は根をすなおに広らせることと、根の廻りの土を乾かさないように注意するとともに、植穴は大きく深く掘ることが大切です。植えつける時に根を丸めたり、曲げたりして植えますと、根が発達しにくいので成長がおくれます。このようなときには、肥料の効果は現われにくいですが、またはおくれて肥料の効果が見られるものです。

植穴を大きく、深く耕し、木の根や草の葉を混ぜないで、土と根をよく接触させることは施肥の場合だけでなく、一般造林の場合にも大切なことです。ところが土壌によっては表土とその下にある土の性質がいち

じるしく違うものや、かたまりになりやすい土、また石ころが多すぎて、掘り返すと土が少なくなってしまうものなどがあります。したがってよく耕して土をほぐして植えるのがよい場合、下の土をだしてその中に根をなじませて、表面の土を上からかけた方がよい場合、さらに一鍬植えなどといわれる方法を使って、あまり土を動かさずに植えた方がよい場合があります。

(3) 下刈について

下刈について施肥しない場合と大分意味がちがいます。普通の場合ですと、下刈は植栽木に陽光をあたえ通風をよくし、土壤水分の争奪の条件をよくすることが目的です。したがって下草が相当繁茂してから刈った方が、回数も少なく、有効に作業ができますし、草も弱ってその後の伸びも悪いものです。ところが施肥した場合は、造林木の近くの草が肥料を吸い取って、造林木にかぶさってきます。したがって下刈は早目に行わなければなりません。肥料の効き目がありますのは、施肥後そう長くありませんから、その時期に下草に肥料を吸われてしまつては、意味がなくなります。そこで施肥するときには、第1回の下刈を行なって葉のない状態にして草の吸収力をおとし、伸びだしたところで第2回目の下刈を行なうのがのぞましいことです。また一般の下刈では造林木に鎌があたって傷つきのをさけるためと、能率をよくするために、植栽木の枝の下のごく近いところは、ていねいに刈らなくてもさしつかえないことです。しかし施肥した場合ですと、下刈の目的が下草に肥料を吸わせないことにありますので、肥料を吸い取る下草は、ていねいに刈り取る必要があります。

以上述べましたことがらは、10年に満たない研究の成果ですから、まだまだ解明されないことが多く残されています。したがって林地肥培を試みる場合にははじめは小面積について試験的に行ない、その結果をみながら効果のある場合には、次第に広げていき、しかも研究的な態度で観察するようにしたいものです。

ニッポン放送“林業講座”

きょうの林業あすの林業より抜萃